

# 『源氏物語』 「もぬけ」 考

——空蟬の残した衣をめぐつて——

小坂部 悟 美

はじめに

『源氏物語』空蟬巻に、空蟬の小桂を源氏が持ち去るという有名な場面がある。ここは空蟬が置いていった衣を源氏が持ち去ったとするのが通説である。しかしながら、本文中に空蟬が衣を脱いだという記述はない。それどころか空蟬は「生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり」(空蟬巻124頁<sup>1</sup>)とあって、逆に単衣を着ているのである。

実のところ空蟬が衣を脱ぎ捨てていったと見たのは、誤って軒端萩と契った源氏が、近くにあった衣を「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣」(127頁)と捉えたためである。この時周囲は暗闇であり、身近にある衣の色や模様などを視覚的に識別する

ことは不可能だったはずだ。それにも関わらず、源氏はその衣を空蟬のものとして信じ込んでいる。ということは確信を得られるような何か——たとえば香りなどがあったのだろうか。

そこで問題の衣を示す「もぬけ」「薄衣」「小桂」という言葉に着目してみた。「もぬけ」は空蟬という巻名に関わる重要語だが、やや特異な言葉であるため看過されていたようである。そこで一つの衣を複数の言葉で言い換えている点を含めて考察してみた。特に「もぬけ」の用例は「かの」という指示詞を伴って用いられているので、「かの」が指し示すものも合わせて帯木巻から夕顔巻における空蟬の衣装表現も調査してみた。

その結果、「もぬけ」と「薄衣」は空蟬と源氏それぞれが互いの慕わしさの象徴として呼応している言葉であることがわ

かつた。さらに「小桂」は一般的かつ客観的な表現だが、そこに空蟬の分身的意味が込められていることが明らかになった。やはり衣は意図的に使い分けられていたのである。

### 一、「源氏物語」「もぬけ」考

まず『源氏物語』の中の「もぬけ」の用例を巻の早い順に並べてみる。

- ① かのもぬけを、いかに伊勢をの海人のしほなれてやなど思ふもただならず、いとよるづに乱れて。(空蟬巻130頁)
- ② なほかのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。(夕顔巻190頁)
- ③ もぬけたる虫の殻などのやうに、まだいとただよはしげにおはす。(若菜下巻24頁)

①の「もぬけ」は地の文で名詞として用いられている。もともとの意味は「蟬の脱け殻」であるが源氏が詠んだ、

a 空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな  
(空蟬巻129頁)

の歌を受けて、比喩的に空蟬が残していったと思われる「薄衣」をさしている。また和歌の技巧として頭注二九に「人が

ら(柄)に「殻」をかける。」(129頁)と注されている。その他に「人がら」に「人香」がかけられているという説もある。<sup>2)</sup> ②も同じく地の文で、空蟬が残していった「薄衣」をさしている。なお①②では「もぬけ」の上に「かの」が用いられていることに留意しておきたい。

次に③は「もぬく」という動詞として用いられている。この動詞は『古語大辞典』では、「蟬や蛇などが、成長する時期に表皮を脱ぐ。脱皮する。」という意味で載っており、『角川古語大辞典』ではさらに「抜け出る。抜け出してなくなってしまう。」の意も付け加えられている。ここでは下に「などのやうに」とあるので、比喩的に「脱皮した虫の殻などのやうに」の意になる。紫の上の死がそう遠くないことを暗示しているのかもしれない。

これらのいずれの「もぬけ」も、具体的な「脱け殻」や「脱皮する」行為そのものを表しているのではなく、比喩表現として用いられていることがわかる。ついでながら辞書にある「蛇」の例は、平安期の作品には見つからなかった。<sup>3)</sup> そもそも「もぬけ」とは、辞書の意味にあるように「脱け殻」や「脱皮」のことである。生活の多くを邸宅の中で過ごす貴族女性にとっ

て、身近なものであったとはとても言えそうにない。それは美  
的なものでもない。ではあえてそのような言葉を用いたことに  
は、どのような意図が隠されているのだろうか。

まず空蟬だが、帚木巻で源氏が頭中将らと「雨夜の品定め」  
をした翌日に初めて登場する。非常に慎ましい振舞いをする空  
蟬は、自然と源氏の関心をひいてしまうが、源氏を拒み続ける  
その理由として、空蟬は年老いた伊予介の後妻である自分の境  
遇は、源氏とはつりあわないものと考えている。そのため、空  
蟬が自分のことを卑下する態度が、「もぬけ」という言葉とし  
て表れたのではないか。しかも実際に物語で使われていること  
から、貴族の間で「もぬけ」は具体的な「蟬の脱け殻」そのも  
のではなく、抽象的な比喩的表現として可能だったのだろう。

## 二、『源氏物語』における「薄衣」と「小桂」

『源氏物語』には「薄衣」という言葉もある。この「薄衣」  
は『古語大辞典』において、i「薄い着物。薄ごろも。」ii  
「紗や絹のような、地の薄い絹織物。」と記してある。そもそも  
この言葉は、空蟬巻の「もぬけ」を調べた際に、同じく空蟬の  
衣装の記述として用いられていた特殊表現の一つだ。<sup>4</sup>この「薄

衣」が『源氏物語』には二例のみ見られる。いずれも空蟬巻の  
用例であり、源氏が空蟬のもとへ忍んでいった際、空蟬が残し  
ていったと思われる衣のことを指している。まず一例目は、

④ かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣をとりて出でたまひぬ。

(空蟬巻127頁)

とあり、源氏が誤って軒端萩と契った翌朝、空蟬が残した衣を  
持ち去る場面である。直前に「見ゆる」とあることから、ここ  
での「薄衣」は、源氏自身がその衣のことを空蟬が残していっ  
たものと考えていることが分かる。つまり源氏の視点から描か  
れているといえる。続いて二例目だが、

⑤ かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近

(空蟬巻130頁)

く馴らして見るたまへり。

という、源氏が持ち帰った衣を身近に置いて眺める場面である。  
空蟬の焚いた香の香りや汗などの染みだ衣に対する、源氏の異  
常なまでの執着が見られる。ここでも「薄衣」は源氏視点で用  
いられている。つまり、『源氏物語』における「薄衣」は、空  
蟬巻で空蟬が残していったとされる衣のことを直接的に指す言  
葉と考えてよい。同じ巻内であるが、「薄衣」が固有名詞とし  
て使用され、また源氏の視点からのみ用いられているという点

は、着目すべきである。

また「薄衣」の他に、空蟬が残していったとされる衣を表す「小桂」もある。こちらは「薄衣」と比べて一般的な言葉である。そのため用例数も多く、『源氏物語』中に二十四例見られる。その「小桂」を所有者毎に用例の多い順に並べてみると、空蟬四例、紫の上・明石の君・浮舟が各三例、末摘花・玉鬘が各二例、軒端萩・大宮・小少将・中の君・落葉の宮が各一例、不特定二例となっている。そして、この中で一番多いのが空蟬の用例だ。この用例は、空蟬巻に二例、夕顔巻に二例見られる。空蟬巻の例を見ると、

⑥ ありつる小桂を、さすがに御衣の下にひき入れて、大殿籠れり。  
(空蟬巻129頁)

とあり、源氏が、空蟬のもとへ忍んでいった際に逃げ出した彼女の衣を持ち帰り、身近に置いて休むという場面である。要するにここでの「小桂」は、空蟬が残したとされる衣のことを指している。次に二例目は、先ほどの場面から続き、結局源氏は休もうとしたが眠れず、用例⑤にある通り、空蟬の衣を眺めているのである。続いて夕顔巻では、場面も空蟬が夫伊予介につき従い任国に下るところに用いられている。

⑦ また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかきさつまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。  
(夕顔巻194頁)

源氏は饞別にと特別な贈りものをするが、源氏が持ち帰っていた空蟬の衣も一緒に返している。これら三例に共通していることは、ここでの小桂は全て空蟬の衣であり、この動作の主体も全て源氏視点で用いられているということだ。四例目も、源氏から返された衣と共に届いた歌に空蟬が返歌する場面であるが、

⑧ 御使帰りにけれど、小君して小桂の御返りばかりは聞こえさせたり。  
(夕顔巻195頁)

とあり、ここでも同じく空蟬の衣のことを指している。動作の主体は空蟬であるが、源氏への返歌ということで、源氏視点の延長と見たい。

次に、空蟬の用例と比較するために他の登場人物の例を見る。二例以上見られた紫の上・明石の君・浮舟・玉鬘に焦点を当ててみると、いずれの登場人物も同じ場面の中で描かれた用例は見つからず、それぞれの衣が同じものである確証は得られなかった。特異な例として末摘花があげられるが、空蟬の例と同

じく「小桂」が同じ衣を指してはいるものの、時間経過を経ず  
に巻を跨ぐことなく使われている。そのため物語展開としても、  
空蟬のような重要性は認められない。

以上のように、空蟬の用例を中心に見たが、空蟬の用例は  
「小桂」の『源氏物語』全二十四例のうち四例をしめ、しかも  
その四例が、巻を跨いで用いられている。それでも「小桂」と  
いう言葉が同一の衣を指し続けているというのは、空蟬の用例  
の特殊性を表出しているといえよう。

### 三、空蟬の衣装に関する表現

『源氏物語』中の「もぬけ」の用例としてあげた三例のうち、  
①②の「もぬけ」にはその直前に「かの」という指示詞がつ  
けられていた。そのためここでは「かの」にも注目し、「かの」  
が指し示す箇所を探し、帯木巻から夕顔巻にかけての空蟬の衣  
装に関する表現を抜粋してみた。すると十三例見つかった。ま  
ずは帯木巻から見てゆく。

- ⑨ なまわづらはしけれど、上なる衣おしやるまで、求めつ  
る人と思へり。  
(帯木巻99頁)
- ⑩ ともかくも思ひ分かれず、物におそはるる心地して、

「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて音にも立てず。

(帯木巻99頁)

⑨⑩は、源氏と空蟬が初めて契る場面であるが、⑨⑩の  
「衣」は同じものをさす。しかしその他の記述はないため、再  
び源氏が空蟬のもとへ忍んでいった際の空蟬の衣との関係は不  
明である。続いて、空蟬巻で源氏が空蟬を垣間見る場面を見る。

- ⑪ 母屋の中柱に側める人やわが心かくるとまづ目にとどめ  
たまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、  
頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、

(空蟬巻120頁)

このときの空蟬は、「濃き綾の単襲」の上に「何にかあらむ」  
上着を着用していた。そして、空蟬はその夜源氏が忍んできた  
ことを察知し、「生絹なる単衣をひとつ着て」逃げ出した。

- ⑫ あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら  
起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけ  
り。  
(空蟬巻124頁)

この場面で空蟬が上着を脱いで置いていったという記述はな  
い。脱いでいったと見たのは、軒端萩を空蟬と人違えして契つ  
た後に、④にある通り源氏が「かの脱ぎすべししたると見ゆる

薄衣」と推測したからである。「何にかあらむ上に着て」とさ  
れていた上着は、その後「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣」  
や「ありつる小桂」などと表現された衣と同じものだという説  
が一般的だが、この「薄衣」が空蟬のものであるという確証は  
ない。

空蟬が残していったとされ、源氏が持ち去った「薄衣」は  
⑤⑥のように表されている。ここでは源氏の空蟬の「薄衣」  
に対する異様なまでの執着が描かれている。これらの用例は地  
の文であるが、源氏に焦点が当てられている。⑥では「あり  
つる小桂」、⑤では「かの薄衣は小桂」とあり、⑤での「薄  
衣」と「小桂」は同じものを指すことになる。

同じく空蟬巻の①だが、空蟬は自分の「小桂」が源氏の手元  
にあるということを知り、心乱れる場面である。ここではじめ  
て「小桂」が両者の間で意味を持つことになる。①は空蟬の  
心内文であり、空蟬の視点で語られている。ここで初めて「も  
ぬけ」という表現が現われており、これは本文の直前にあつた  
aの歌にある「空蟬」の言葉を受けてのものと考えられる。  
「空蟬」から「もぬけ」が連想されたが、それは源氏の認識で  
はなく空蟬自身の規定である。

次に夕顔巻の②に移る。夕顔を亡くした源氏は病に倒れる  
が、空蟬より見舞いの歌をもらい返歌をする。その返歌を目に  
した空蟬が、あの「薄衣」を源氏はまだ忘れていない事実を  
知ったときの記述が②である。これも空蟬から「もぬけ」が  
連想されたが、必ずしも源氏が「もぬけ」と考えているわけ  
ではない。そして同じく夕顔巻での⑦だが、源氏が、任国に下  
る伊予介につき従ってゆく空蟬に贈りものとともに、かつて自  
分が持ち帰った小桂を返す場面である。ここでは「小桂」と表  
現され、⑦の主語は源氏である。

⑬ 逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちに  
けるかな (夕顔巻195頁)

これは源氏が贈りものや「小桂」とともに空蟬に贈った歌で  
ある。これによって源氏は空蟬の「小桂」を空蟬本人の分身、  
もしくは形見としていたことが分かる。それに対して空蟬は  
⑧のように小君に託して、「小桂」の歌に対する返事を源氏に  
贈っている。この一文の主語は空蟬で「小桂」と書かれている。

⑭ 蟬の羽もたちかへてける夏衣かへすを見て音はなかれ  
けり (夕顔巻195頁)

ここでは、空蟬が源氏との関係を過ぎ去ったものと考えなが

らも、まだ整理のつかない心中を詠っているのが分かる。また季節の推移も読みとれる。その上、「蟬の羽」として「空蟬」としていないところも見られ、表現のずれがある。

これまでの例にあつたように、「小桂」とは一般的かつ客観的表現といえる。それに対して「薄衣」は、源氏の主観を映し出している。それは⑤に顕著に見られるが、源氏にとつては「小桂」に「いととなつかしき人香」が染み込んだものが「薄衣」なのである。広義としての「小桂」と、その中に含まれる狭義の「薄衣」と捉えたい。そもそも「薄衣」とは、辞書的意味にもあるように夏場に身につける地の薄い衣であり、その衣一枚まどつているだけでは素肌が透けて見えてしまうものである。まして、品のある空蟬が焚き染めた香の香りや、彼女自身の匂いもほどよくしみているものであつたならば、そのような衣を源氏が手にしたとき、どのように思うであろうか。

#### 四、「小桂」と「薄衣」の使い分け

一度きりではあるものの一夜を共にし、その慎ましさや強情なまでのつれなさに惹かれる彼にとつて、「薄衣」は空蟬との一夜を想起させる官能的な代物となりうる。つまり「薄衣」と

は源氏にとつてプラス要素であり、空蟬に対する好意や思慕・興味関心の表れと言える。

源氏にとつてのキーワードが「薄衣」であるならば、それに呼応する空蟬のキーワードが「もぬけ」である。空蟬の視点で考えれば、源氏に持ち去られた「小桂」は、いくら香を焚き染めてあつたとしても、着なれていたための体臭や汗の匂いなども染みており、とても源氏に差し出すようなものではなかつた。その極端なまでの自分を卑しめる気持ちには、「もぬけ」という象徴的な表現の中に、彼女自身の屈折した思慕の情も隠されていたのではないだろうか。源氏が持ち去つた衣は、空蟬にとつても彼女の分身としての役割を果たしていたといえる。空蟬自身の心の奥深くにある源氏への愛情が、自分の代わりに源氏のもとにあるその衣のことを憎からず思わせていたとは考えられないだろうか。

また、源氏主体で用いられる「薄衣」は、④⑤にあるように「かの薄衣」という形で使われている。それは単なる衣ではなく、それをまどつていた空蟬を特定する表現である。そして①②では、空蟬が「もぬけ」を用いる時も「かの」が用いられていた。つまり、源氏にとつて「薄衣」が空蟬を想起させる

ものであったと同時に、空蟬にとつては「もぬけ」が源氏への想いの表れであった。この点からも「薄衣」と「もぬけ」は両者の慕わしさの象徴として対応している。そして、その衣が本来上着であるはずなのに下着を思わせるのは夏だからであり、まさに「もぬけ」らしい印象である。

ここでもう一つ考えたいのは、空蟬は源氏に「薄衣」を持ち去られたことをどこで知ったのかということだ。繰り返すことになるが、本文中に空蟬が衣を脱いでいったという記述はない。空蟬が衣を脱ぎ捨てていったと見たのは、源氏の独断であり、しかしこのとき周囲は暗闇であり、身近にある衣の色や模様などを識別することはほぼ不可能だったはずだ。けれど源氏はその衣を空蟬のものと信じ込んでいるということは、確信を得られるような何かがあったということである。視覚の利かない闇の中で衣を識別するのに頼りとなるのは、嗅覚であろう。恐らく衣の匂いが手がかりだったのではないだろうか。源氏は最初の逢瀬で「小桂」に染みた空蟬の匂いを記憶していたのだ。

また⑩に「いとなつかしき人香に染めるを」とあるように、源氏自身が衣についた空蟬の匂いを認識している。この匂いは香の香りもついていたにしろ、汗や体臭なども染みていたと考

えられ、必ずしもよい匂いであったとはいえない。しかし源氏はそんな匂いでさえも愛おしく感じていた。匂いとは、過去の出来事を想起するきっかけともなる。空蟬とは一夜を共にしただけが、その立ち居振る舞いに惹かれ、その後も彼女に慕わしさを募らせていく。源氏は、軒端萩の傍らにあった「小桂」を迷うこともなく空蟬のものと確信したのである。そこに並々ならぬ恋情が見て取れる。

また⑦のように、源氏は任国に下る夫につき従っていく空蟬へその「薄衣」を返している。男女の仲で衣を返すということは、当然別れを意味する。この行為によって、空蟬物語は終焉を迎えたと見ることもできよう。しかし別の読みも可能である。

というのも、当初は空蟬の匂いが染みついていた衣であり、だからこそ源氏は⑤⑥にあるように空蟬の衣を分身として身近において過ごしていたのだ。そうすることにより、その衣には本来の空蟬の匂い以上に、源氏本人の匂いを移り香として強くまとわせている可能性がある。つまり、空蟬の形見であったはずの衣が、ここでは源氏を想起させる形見として機能しているとも読める。<sup>6</sup> そんな衣を源氏は空蟬にあえて渡したのだ。そ



の一連の行為には、源氏の存在を空蟬の中により鮮明に印象づける効果があるのではないだろうか。

## 結 び

以上、「源氏物語」における「もぬけ」を中心に、「薄衣」「小桂」の存在意義を考察した。空蟬物語は、多用される衣装表現によって巧妙に展開していったのである。

特に「もぬけ」には空蟬の己を過小評価する心情や劣等感などが反映していながら、源氏への屈折した思慕も内包されていた。それに対して「薄衣」は、源氏が空蟬の衣をそう捉えることで彼女への忘れがたい思いを表していた。この二つの言葉は両者の慕わしさの象徴として対応していったのである。

また「小桂」は、本文の記述では空蟬の衣である確証は得られないものの、それを源氏が香り（嗅覚）によって空蟬のものとして判断したと考え、そこに空蟬へのより強い執着があると考えてみた。その衣装表現には、源氏の空蟬に対する感情を認めることもできそうである。

空蟬物語では特異な「もぬけ」表現を用いて、巧妙に空蟬と源氏の心内とそのずれを描き分けていたのである。

## [注]

- (1) 本論文の引用は、特別に注記しているものを除き全て『新編 日本古典文学全集』（小学館）によった。なお、巻名・頁数、また必要な箇所には傍線を付した。
- (2) 吉海直人氏「嗅覚の「なつかし」——『源氏物語』空蟬の例を起点として——」『日本文学論究71・平成二四年三月参照。ただし「人香」の用例が少ない（『源氏物語』に三例）ので、掛詞として確立しているわけではなさそうだ。吉海直人氏「移り香」と夕顔『源氏物語の新考察』（おうふう）平成十五年一〇月参照。
- (3) ただし漢文（莊子・神仙伝など）では、「蛇の抜け殻」という意味で「蛻」が用いられている。
- (4) 『源氏物語』には「薄衣」以外に「薄雲」など「薄」の初出例が認められる（造語か?）。
- (5) 倉田実氏「空蟬の衣——天の羽衣と戸解仙、そして〈逢ひて逢はぬ恋〉の生成——」『国文学解釈と鑑賞別冊』（至文堂・平成十三年六月）によれば、空蟬が一番上に着ていた表着は、「何にかあらむ上に着て」とほかされているものの、これが「ありつる小桂」、「かの薄衣は、小桂の」などと語られる源氏の手に渡った「薄衣の小桂」であったという解釈は、現行テキスト類皆同じのことである。しかし実際のところ、これらが同じ衣であるという確証はない。「ありつる小桂」

(空蟬卷124頁) 以前の「小桂」の用例は、「白き羅の单襲、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはにはうそくなるもてなしなり。」(空蟬卷124頁) という軒端萩の一例のみである。つまり「ありつる小桂」といった場合、「ありつる」が指し示す箇所は「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣」であり、必ずしも「何にかあら

む上に着て」まで含まれるとは限らない。

(6) 注(2)「嗅覚の「なつかし」論文の注(13)には、「その小桂には、源氏の移り香が染みているはずである。それを手にすることによって、今度は空蟬が源氏を想起することになるのではないだろうか」と述べられている。